



鶴谷病院 連携室 便り



医療法人 鶴谷会の理念

- ①“人間愛”をもって患者さんに 接し、心のかもった医療・介護サービスに尽くすこと。
 - ②日進月歩する医療・福祉に対して前向きに取り組み、“チームワーク”を大切にすること。
- これらをふまえ、質の高い医療・介護サービスを地域の方々に提供する。

〒370 - 0117
 群馬県伊勢崎市境百々4 2 1
 TEL : 0270-74-0670
 FAX : 0270-74-3775
 URL:
<http://www.tsurugaya.or.jp/>

新任医師のご紹介



☆プロフィール☆

きのした てるひこ

木下 照彦

1963年 沼田市生まれ

H2年 長崎大学卒

H10～H18 当院、外科勤務

H18～H20 群馬県立がんセンター乳腺科勤務

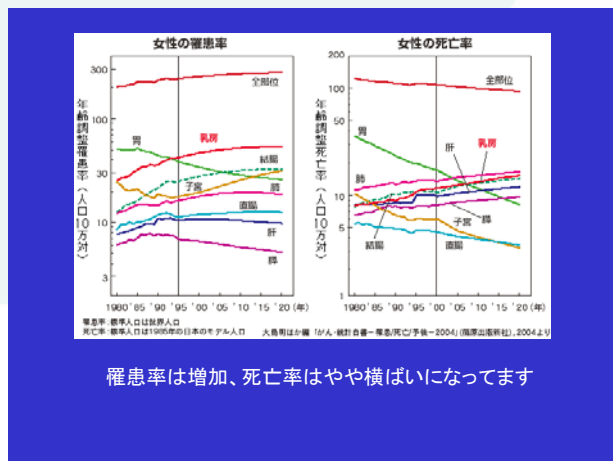
H20年4月～当院にて外科外来を担当

平成20年4月1日より当院にて勤務することになった木下照彦です。専門は外科で主に乳腺疾患、消化器疾患の診療に携わっております。以前、平成10年6月より平成18年3月まで当院に勤務しており、その後、平成18年4月より平成20年3月まで2年間群馬県立がんセンター乳腺科にて乳癌の診療、研究をしていました。

乳癌は、体表の臓器であり、また近年、罹患率、死亡率とも増加しているため、他の臓器の癌に比べ臨床試験も進んでおり、新しい診断法、治療法(手術、薬物療法、放射線療法など)が増えてきました。乳癌は早期に発見すれば、治る確率が高い病気です。「怖いから」、「自分とは関係ないから」といって目をそらさず、正しい知識を得、検診を受けたり、医療機関を受診したほうが良いと思います。

○疫学○

乳癌は1970年代以降増加の一途をたどっており、日本では年間約4万人の女性が乳癌にかかり、日本人女性の20～25人に1人が一生のうちに乳癌にかかるといわれています。平均年齢は約50歳といわれていますが、20歳代、30歳代の乳癌患者さんも増えてきています(欧米では7～8人に1人がかかるといわれています)。マンモグラフィー検診の普及により非触知乳癌(しこりを形成する前の乳癌)も増加しています。



○乳癌の症状○

乳癌の自覚症状は、乳房のしこりが最も多く、他には乳頭異常分泌(血性)があります。自覚症状がない場合も(検診でひっかかった)15~20%程見られます。乳房の痛みで受診する方も多いですが、乳癌による乳房の痛みは、かなり進行した癌か、特殊な乳癌のみで、乳癌の初発症状で痛みが出ることはほとんどありません。ただし乳房痛の患者さんの検査をして偶然、乳癌が見つかることもあります。

○乳癌の診断○

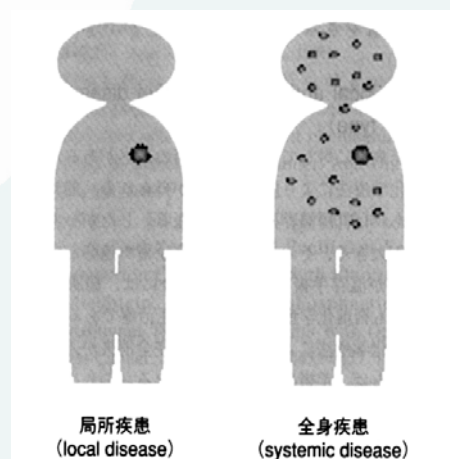
乳癌の診断は、まずマンモグラフィー、乳房超音波検査(エコー)を行い、乳癌を疑う病変があった場合、その病変部に針を刺して組織を取ります。その組織を病理の先生に見てもらいがん細胞があれば乳癌と診断します。針を刺して組織をとる方法は、しこりがわかる場合はエコーでみながら針を刺します。しこりがなくマンモグラフィーで悪性を疑う石灰化のみの場合は、マンモトームという特殊な器械を使います(当院にはないので、群馬県立がんセンター、または伊勢崎市民病院に依頼)。

○全身の精査○

乳癌はしこりを形成した時点で局所の病気ではなく、全身の病気と考えられています。したがって全身の他の部位に転移していないかどうかを調べます。転移しやすい臓器は、骨、肺、肝臓、脳の順に多いといわれています。

○乳癌の治療の目的○

乳癌の治療は、初期治療と転移・再発の治療で目的が異なります。転移のない乳癌の初期治療の目的は治癒を目指すことであり、転移のある乳癌、再発乳癌の治療目的はQOL(生活の質)の改善と症状緩和、延命です。転移・再発乳癌は現在の医学では治癒は難しいとされています。ただししっかりした治療を行えば、QOLを保ちながら数年以上健在な方も時々見られます。



○乳癌の治療○

乳癌の治療は大きく分けて局所治療と全身治療があります。局所治療とは手術と放射線治療です。手術は以前と比べ温存療法をはじめ縮小傾向にあります。全身治療は薬物による治療で、化学療法(抗がん剤)、内分泌療法、抗体療法などがあり、それぞれの症例に応じ最善と思われる治療を行います。

乳癌は癌のなかでは進行も遅く、早期診断・早期治療により治癒する可能性の高い癌です。乳癌検診を受け、自覚症状があるときは恥ずかしがらず医療機関を受診するようにしましょう。